ごあいさつ　　山口市有機・環境保全型農業公園を造る会　代表・安渓遊地

本日は、はるばる茨城県から日本有機農業研究会の理事長である魚住道郎さんにお越しいただいて、足立区都市農業公園での有機農業の 20 年の歩みを中心にお話しいただけることになりました。開催の趣旨は、チラシにある通りです（https://ankei.jp/yuji/?n=2942 参照）。

わたしどもの山口市にも有機をめざす農業公園を作りたいという夢について、会を代表して安渓遊地が、日本有機農業研究会の機関誌『土と健康』の次号が、農業公園特集となることから、寄稿させていただいた文章と、同研究会副理事長である久保田裕子さんが昨年書かれた文章を資料として配布いたします。本日上映される足立区都市農業公園の四季を紹介するすばらしい写真は、日本有機農業研究会の平島芳香さんの撮影で、右上の QR コードでもご覧いただけます。

やまぐち有機農業公園の夢

私たち「山口市有機・環境保全型農業公園を造る会」は、一八ヘクタールを超える山口県農業試験場跡地を農業公園にすることを提案しています。有機の農地が広がり、ハウスもあって、動物たちとふれあえる。循環型の堆肥づくりから収穫された食材を食べるところまで体験して、学び、遊び、自然とともに生きる。研修・宿泊棟やテント村があり、県産材の本館棟は地域のコミュニティセンターを兼ねる。子どもたちが朝から晩まで過ごしたくなるそんな農業公園の夢を一枚の地図にまとめました（図、カラー版は、https://ankei.jp/yuji/?n=2899）。

「造る会」の代表をお引き受けした私は、四〇歳になる息子を中心に、島根県の津和野町まで一〇キロほどの山口市北端の高原にある「阿東つばめ農園」（写真１）で二〇一二年から有機の家族農業を実践している、もと大学教員です。「やまぐちの種子を守る会」の世話人である妻の安渓貴子とともに、瀬戸内海の「奇跡の海」上関町での原子力施設計画への生物多様性保全活動も続けています。

昨二〇二三年四月、山口市大内地区の山口県農業試験場は、防府市にある県立農業大学校敷地へ合同移転し、跡地の再開発計画策定を山口県と山口市がコンサルタントに委託。参入したい企業の希望を聞く「サウンディング型市場調査」によって、同年一一月に脱炭素のスマートシティとしての商業施設と住宅地開発の計画案が発表されました。この案に、山口市の中心商店街の店主たちは怒りました。一九九七年に大内地区に郊外型ショッピングセンター・ゆめタウンが進出したあと、商店街の人出は半減し、歴史ある百貨店も二〇〇八年に閉店。この計画は、商店街にとって死活問題であるだけでなく、郊外への人口流出を加速します。人口減少と空き家の激増が進んでいる地方都市で、市民の意見でなく企業の希望だけを聞いた結末の昭和のバブル期のような計画案は、山口商工会議所を通じた強硬な反対で頓挫しました。

市民サイドからの提案を模索する中で、有機農業公園のアイデアが浮上。いまある農地やハウスや林地をできるだけ活かし、生物多様性国家戦略の「保護区」にもなりうる案を、今年八月に山口市と山口県に申し入れました。同時に開始した署名活動（写真２）には、子どもたちが自然の中で自由に遊べるプレーパークを求めてきた人たちも賛同し、共感が広がっています。

時代を吹く風は変わったのです。有機給食への要望も高まっています。二〇五〇年に農地の四分の一を有機にするという国の目標に沿うオーガニックビレッジ宣言へ向けて、県内の市町が取り組む起爆剤にしたいですね。一〇月一二日には、日本有機農業研究会理事長の魚住道郎さんを山口市にお迎えして、足立区都市農業公園での長年の実践を「『有機農業公園』にかける夢」としてお話していただきます。有機農業なんて非現実的と思ってきた山口県民の意識が変わることを楽しみにしています。

セミナー「有機農業公園」にかける夢」基調講演のあらまし

日本有機農業研究会理事長　魚住道郎

山口県農業試験場跡地利用について 有機農業公園の設立の目的とめざす方向性の私案

現状認識

1. 気候変動の危機
2. 世界の政情不安の危機
3. 南海トラフ、首都直下地震と津波の危機
4. 生産者人口の高齢化と担い手不足は食料自給力低下の危機

これらの危機に対し、現在の食料自給率 38%はあまりにも危険水準。2050 年までにみどりの食料戦略で有機農業 100 万ヘクタール目標は良いが、上記の危機が同時並行で迫っている。

また、これらの危機に対し食料安全保障が重要課題となっているが、食料の量の確保と質、すなわち食料自体の安全性の向上も問われなければならない。

迫り来るこれらの危機に対応する有機農業公園のイメージは

1. 食料、飼料の海外依存をやめ、国産で食料自給 100%の自立国家をめざす。有機も慣行も、小規模も大規模も力を合わせる必要がある。農家、林家、漁師と市民が力をあわせ、森里海を守る交流拠点とする。
2. 農業生産は海外からの農業研修生（労働者）に依存せず、日本の若者や転職者の有機農業研修場としての機能も持たせる。
3. 子どもや一般市民、慣行農家が有機農業の実際を間近で見たり、土に触れ、栽培作業の体験を通じ「農」を体感することにより、「食」を実感する。農業の大切さ、楽しさ‥‥‥美しさを学ぶ貴重な場と空間。
4. 農業アシスタント（ボランティア）の育成
5. 近隣小中校の学校田畑を併設、学校給食と連動できると良い
6. この公園はこの地域、流域の森里海のいのちの循環基盤を土台とする有畜複合の有機農業流域自給のモデルの構築。
7. 気候変動にも適応する伝統野菜や穀類、豆類、イモ類をはじめ、たねの自給。
8. 地域、流域自給で芽生える生産者と消費者の提携‥‥‥縁農
9. 小規模再生可能エネルギーの試みや炭焼き
10. 有機農業に向けたアイデア農具作り
11. 地域、流域自給の生産物販売所やレストランや朝市の開設など

これらの目標の達成には山口県下の有機農業生産者の協力が必要で、かつ周辺の市民農業アシスタント（ボランティア）の同時養成と連携が不可欠かと考える。

足立区都市農業公園での実践

スライドショウで（右上の QR コードにスマホをかざすことでも閲覧可能）

以上